

シリーズ 私の一冊の本

食品栄養科学部 板井隆彦 先生

宮地伝三郎著 『生物学の視座から』

閲覧室 2 階 480.4/Mi 75 人文書院 出版

著者の宮地伝三郎先生は京都大学の名誉教授で、日本生態学会の創立に尽力され、初代の学会長となった方です。先生は東京大学理学部で動物学を修めて京都大学の臨湖実験所に赴任され、臨海実験所を経て理学部動物教室に移られ、退官後に(財)日本モンキーセンターの所長に就かれ、研究分野も陸生物学から水生生物の生態学そして霊長類の社会学へと移された。著書も多分野にわたり、「動物の生態」、「アユの話」、「サルの話」(いずれも岩波書店)などがあります。

弟子の面倒見のよいいわゆる親分型の先生で、研究室からは多くの学者が輩出しています。私は先生の直接の弟子ではありませんが、先生の手記された著書のうち約10冊を所有し、そのうち3冊は先生の銘がはいったいただきものです。先生の気配りは孫弟子にあたる私どもにまで及んだあかしです。ここで紹介するのはその1冊で、日本モンキーセンターからさらに(財)淡水生物研究所に移られた頃にまとめられたいささか古いエッセイ集で、銘には「あゆの食む卵の花のこぼるる岩を 非泥」とあります。内容は研究歴を映し淡水生物からサルに至るまで多岐にわたりますが、じつは先生の研究遍歴や学習について考えたエッセイの存在が、とくに皆さんに勧める理由です。

先生の研究の遍歴や研究に対するお考えはエッセイ集の中ほどに納められています。「さまよえる生物学者」を自称された先生は、研究分野をできるだけ狭くしないように心がけられたようです。弟子にも、とくに研究者として当然メジャーな研究課題をもつほか、マイナーな課題をもつことが、観察や実験に携わる研究者にとって、研究が業務化して論文作成機に成り下がらないために必要と説き、勧めています。

学習についてのエッセイは巻頭に置かれています。霊長類の行動における学習の役割についての研究は先生の研究分野のひとつですが、エッセイではまず論語の「学而時習之、不亦説乎(まなびて時に之を習う、またよろこばしからずや)」を引いて、知的修得の発足としての「学」、それを反復おさらいして体得する「習」の違いをまずはっきりさせます。そしてヒトのような文化型動物の社会行動には生得的なものは少なく、ほとんどが生後の学習によって獲得され、しかも学習には快楽中枢の報賞系の快感ゆえにすべてに優先することが生じることを説明しています。学生や研究者が、学習し研究を進めていく上で、学習や研究の喜びがさらなる学習と研究の喜びを生み出していくことをこのエッセイは保証してくれているのです。

なお、先生は俳句もたくみで「俳風風土記」の著書もあります。俳号の非泥は最初に専門とされたHydrobiology(淡水生物学)のHydro-から採られたもので、先生は「ひどろ」と読んでもらいたかったようですが、研究仲間からはひどい俳句と揶揄されて「ひでえ」とよばれるようになったそうで、そのいきさつについてはあとがきに説明されています。